

# 養父市立関宮学園 令和7年度学校評価

令和8年2月17日

## 1 学校教育目標

夢や目標を持ち、自ら学び、こころ豊かでたくましい児童生徒の育成

## 2 重点目標

- ①義務教育学校の特性を最大限に生かした学校づくりを進める。
- ②確かな学力を定着させるとともに主体的に活動する態度を養う。
- ③道徳教育や体験教育を充実し「心の教育」の推進を図る。
- ④両課程の教職員が協同して、資質・能力の向上を図る。
- ⑤学校・家庭・地域が連携し、生きる力を育むとともにふるさとを誇りに思える環境づくりに努める。

## 4 学校評価の実施方法及び総合的な学校関係者評価

- 実施の方法
- ・10月及び1月に全職員による学校自己評価を実施
- ・1月に保護者にアンケートを実施
- ・2月17日に学校関係者評価委員会（学校運営協議会）を実施
- 総合的な学校関係者評価

## 3 学校自己評価結果 (A 優れている B 良い C おおむね良好 D 要改善)

分野	評価項目	達成状況	学校の取組状況及び改善の方策等
学校運営・教育活動	義務教育学校としての学校運営	A	○運動会や合同ユースタイムなどに加え、万博イベントや交流給食など新たな前後期課程の交流活動を行うことにより、児童生徒の多様な体験を実現し、心の成長につなげている。 ○前後期課程の教職員による乗り入れ授業が定着し、高い専門性を生かした指導が行われ、児童生徒の学びの充実につながっている。 △義務教育学校の利点をさらに生かせるよう、15歳の姿を児童生徒、家庭、地域、教職員で共有し、9年間を見通した教育活動を推進していく。
	地域とともにある学校づくりの推進	B	○自治協や民生児童委員、読み聞かせボランティアの方による地域学校協働活動が行われている。「こども園との焼きいも交流」など新たな活動も行っている。 ○学校だよりや学級通信、ホームページの更新により、保護者に積極的に情報発信している。また、自治協だよりへの「関宮学園トピックス」の掲載や、学校だよりの隣保回覧、ケーブルテレビへの投稿により地域にも発信している。 ○昨年度に引き続き「ボランティアお礼の会」を行い、地域と児童生徒との交流を深めている。また、生徒や教職員が「風々忌」に参加するなど、地域活動にも参画している。 △学校運営協議会を通じて、地域との連携・協働をさらに進めていく。
	危機管理体制の整備	A	○防犯グループと連携した登下校指導に加え、新たにスクールパスの発着場所を校内に変更し、児童生徒がより安全に下校できるようにしている。 ○PTAと協力し、引き渡し訓練や心肺蘇生法の研修を継続している。新たに不審者対応訓練を行い、危機管理体制を整えている。 △施設の安全点検だけでなく、安全に教育活動を行えるよう学校備品を適切に管理していく。
	教職員の協働体制	A	○前後期課程の情報共有が図られるとともに、ベテランと若手の協働が進み、教職員の協力体制が確立している。 ○ノー残業デー、ノー部活デー、ノー会議デーを設定するとともに、業務を分担し、ICTも活用して勤務時間の適正化を図っている。 △業務の見直しを図り、児童生徒と向き合う時間を増やしていく。
	教職員の資質向上 (研修、体罰・ハラスメント防止)	A	○校内研修の充実により、前後期課程の教職員が互いに学び合う機会が増え、指導力の向上につながっている。 △引き続き、体罰、ハラスメント、非違行為の防止について研修を徹底していく。 △児童生徒の確かな学力、豊かな心の育成などのために、教職員が資質向上を図る時間を確保していく。
	生活指導	A	○生活指導日誌の共有により、前後期課程の教職員が日常的に情報交換している。新たに「子どもを語る会」を前後期課程合同で行い、共通認識のもと指導を行っている。 ○昨年度から開設している校内サポートルームを拠点に、支援員と連携しながら登校しにくい児童生徒の居場所を確保している。不登校対応について教職員間の連携をより一層図っていく。いじめについて、対応マニュアルに基づいて組織的に対応している。 △生活アンケートや教育相談を行うとともに、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーも活用して、児童生徒の困り感の解消に努めている。すべての児童生徒が相談しやすい環境づくりを進めていく必要がある。
教科指導	自ら学び、自ら考える力の育成	B	○異学年との交流学習を行うことにより、児童生徒が成長を感じたり、目標とする将来の姿を想像したりすることができ、学習意欲が高まっている。 ○対話による学習活動を積極的に取り入れることにより、児童生徒に自ら考えようとする態度が身につけてきている。 △「総合的な学習の時間」を見直し、探究的な学習を実現できるようにしていく。
	基礎の定着と個に応じた学習指導	B	○義務教育学校の利点を生かし、前期課程から教科担任制を導入することにより、系統性や専門性を生かした指導を行っている。 ○定期考査と単元テストの組み合わせにより、学習への動機づけを図っている。 △少人数指導の充実やICTの活用などにより、個に応じたきめ細かな指導を実現していく。 △前後期課程の円滑な接続を図り、学ぶ喜びを感じさせる授業改善、宿題の課し方の工夫などを進め、学力の定着を図っていく。
	道徳教育	A	○県の研究指定を受け、道徳科の研究に取り組んだ結果、授業の改善が図られている。 ○道徳の授業での学びが日常生活に生かされるよう、自分ごととして考えさせる指導により道徳的実践力を高めている。 ○学級担任だけでなく担任外も含めたローテーション授業を行い、さまざまなスタイルで児童生徒の道徳的心情を育てている。
課題教育	人権教育	B	○人権作文コンテストや人権講演会への参加、道徳教育の充実などにより人権意識の高揚を図っている。 ○ジェンダーレスを推進し、個性を大切に「生活の心得」(校則)を運用している。 △いじめをはじめとする人権侵害については、引き続き、未然防止、早期発見、早期対応に組織的に対応していく。
	特別支援教育	B	○校内教育支援委員会のもと、保護者と連携しながら、一人一人に応じた指導や支援を組織的にやっている。 ○新たに通級拠点校となり、学校生活支援教員を中心に児童生徒理解と個別の支援を行っている。 △インクルーシブ教育システムを構築するため、すべての教職員のより一層の資質向上が求められる。
	キャリア教育	B	○学校行事を行うにあたっては、9年間を見通して、キャリア教育の視点を踏まえた目標を設定している。 ○従来のキャリア教育講演会に加え、仕事体験ワークショップを行い、地域から学ぶ体験活動になるよう工夫している。 △キャリアパスポート、キャリアノートをより効果的に活用していく。
	安全・防災教育	B	○交通安全教室や避難訓練などをとおして、安全への意識や能力が高まっている。 ○1・17追悼集会や防災体験活動(消火、煙体験)などをとおして、防災意識の向上を図っている。 △児童生徒がネットトラブルを回避できるよう情報モラル教育をより一層充実させていく。
	特別活動	B	○運動会、文化祭や学習発表会などは、児童生徒の自主性を引き出すよう行っている。 ○児童・生徒会活動では、リーダーを育成しながら、児童生徒のよりよい学校生活を実現しようとする意識を高めている。 △一部の活動が前例踏襲で単調になっているため、児童生徒が課題を見つけ解決させるよう工夫し活性化させていく。
	その他の課題教育	B	○ゲストティーチャーを積極的に招聘し、専門的な指導により、食育、国際理解教育、性教育などの課題教育を行っている。 ○部活動の地域展開では、地域クラブに学校施設を開放するなど円滑な移行に協力している。 △情報教育など新たな課題が求められたり、外部からの要請が増えたりするなか、児童生徒の負担増にならないよう教育活動を精選していく。 △物価高騰により教育活動に係る費用も影響を受けており、対応が必要となっている。

## 5 評価項目ごとの学校関係者評価

学校関係者評価
<ul style="list-style-type: none"> <li>・前期後期課程で新たな交流活動が行われている。異学年交流が活発である。</li> <li>・特認校のように特色ある取組を行う必要があるのではないか。</li> <li>・生徒提案の焼きいも交流は、生徒の主体性が発揮されていて頼もしい。このような取組が増えると魅力ある学校になる。</li> <li>・ボランティアお礼の会が行われ、地域とのつながりができている。</li> <li>・PTAでできることがあれば、もっと頼ってほしい。</li> <li>・児童生徒と保護者・地域の人など、世代によって「地域」に対する想いに差異がある。児童生徒数の減少や、部活動の地域展開で地域行事が児童生徒の負担になっていないか危惧する。世代を超えて理解が進めばよい。</li> <li>・学校にゲストティーチャーとして伝統文化継承で携わっているが、これから対応できる大人が減っていくことが課題である。</li> <li>・不審者対応訓練等、安心・安全な学校のために訓練されていることはありがたい。</li> <li>・スマートフォンの指導については、学校での指導の仕方に研究が必要だと感じる。これからの時代を生きる力として、児童生徒に身につけてさせてほしい。</li> <li>・いじめがネットやSNSで行われている。児童生徒の心を育てることが大切である。</li> <li>・前期課程と後期課程の指導は、発達段階によって違いがあるのは当然である。ある程度必要な部分である。</li> <li>・授業は、児童生徒で話し合いが活発に行われており、教員もそれを支援している。</li> <li>・これまで中間考査を行っていなかったというが、テスト期間があった方が生徒は勉強しやすいのではないか。</li> </ul>